

アノミーの研究：概念図式と因果律をめぐる一考察

牧, 正美

<https://doi.org/10.15017/2328733>

出版情報：哲學年報. 27, pp.253-273, 1968-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

アノミーの研究

—概念図式と因果律をめぐる—考察—

牧 正 美

(1) はじめに

わが国には理論・実証ともにアノミーの研究は少い。disorganization や disintegration, 犯罪や非行の研究は多々あるけれどもそれらは自体としては「アノミー」研究と直接かかわるとはいえない。アノミーとはすぐれて「集合感情」「社会の自我理想」の問題である。かかる視点とのかかわりにおいてのみ、それらはアノミー概念の主要な範疇となってくる。

現在、アノミー研究にとって大別二つの先行研究があって一方は周知の如くデュルケムの系譜に連なるマートンの社会学的アノミー論であり、他方は多くの心理学的乃至社会心理学的アノミーの研究である。小論では主として前者を、その概念図式および因果的認識の問題において考察しようと思うが、問題をこのように設定する必要を感じたのは、デュルケム・マートン理論の内在的検討によっているが同時に、後者の研究群に見られる研究様式・研究手段総じて方法論的特徴的な諸傾向についての考察からも資され促されたところが大きい。社会的規範価値の生成・機能・衰退についての中心的な研究領域であるアノミーの研究は、一方社会それ自体の生成・機能・変動のひとつの主要な構造範疇でありその限りにおいてアノミーがすぐれて社会学的な概念であるものの、他方、逆に規範価値の機能は、すべての社会に普遍的な個々人の生活経験より生ずる欲求・利害の非合理的感情を特定の方向に収斂させる(Canalize)過程に見出されるという事実

からして、かかる心理的側面の考察をネグレクト出来ない。分析的にはどうであれこれはアノミーという対象性に制約された方法上の基本的な約束であると思われる。それゆえ心理主義アプローチよりするアノミー研究の問題状況やその成果についても、可能な限り検討を加えようと思う。またはじめにアノミー概念の検討を通じて因果律一般の問題に考察を進めようという多大の意図をもたないことをお断りせねばならない。個人と社会の関係という社会学の古典的にして本質的な問題にかかわる重要性をもちながらもわが国では閉却視されているこの概念について、その経験的有効性の範囲を確定したいというのが、ここでのささやかな試みの出発点であり目標である。

(2) 心理主義的アプローチの諸傾向と問題状況

一括して心理主義的アノミー研究とはいっても、その内容・意図は多種多様であり無論すべての研究を同一視できるわけではない。しかしながら少くとも対象を心理学的分析視点から、即ち行為者の主観的意識から、また主観的意識状態について観察する点では一致している研究を指すものである。

アノミーとは「不安定感・集団からの疎外感・目標喪失感」¹⁾、「無力感・無規範の感じ・社会的な孤立感」²⁾、「リーダーとの社会的距離感・無力感・不信感、空虚感・目標からの退行の感じ」³⁾など、その定義のしかたはさまざまであるが、なべて人が心に抱く「感じ」であって、外在的・客観的な社会の状態ではない。最近約十年間の主としてアメリカ社会学雑誌⁴⁾で文献を見ると、この心理主義的アプローチがきわめて支配的な傾向として看取される⁵⁾。

それらの中に幾つかの研究タイプなり傾向なりが区別出来る。

第一に顕著な方向はかかる主観的意識の尺度化と数量化の試みである。

ここでの研究手続きの論理は例の多くの「世論調査」の延長ないしその

ものである。質問項目が主として何らかの「知識」に関する問いで盛られていないという違いはある。元來世論調査はものいわぬ大衆の無言の意志・意見を表出させるという役割をもっていた。意志・意見である限り、意識されていると否とにかかわらず、それは将来的に可能な社会行動の準拠枠ないし基準となる論理を示すものと理解され、それによって行動の予測をなすことが調査に期待される。それらとひとしく主観的意識構造の一部を構成してはいるが、「非合理的」感情の支配および論理的価値的準拠枠の欠損の状態を探ることがこの種のアプローチの眼目であるといえよう。社会や集団において個人が経験し知覚した非合理的感情を一定の尺度の上に「標準化」し測定する。ここでの非合理的感情とは仮りに現在意識における欲求と欲求充足の不整合の不分明な知覚と理解しておくことが出来よう。生活者の欲求阻止や相反する利害感情の不分明さや不整合は、正常な社会過程では価値規範、思想・イデオロギーという Channel をろ過され社会行動のリビドー的役割を果たすが、こうした欲求阻止や相反する利害感情の不整合な「あり方」をいわばそのナマの姿にとらえようとする試みは必要であり重要であろう。

しかしながら、周知のように個人に内在的な意識状態を客観化し、しかもひとつの共通な尺度の上に標準化することは大変に困難な作業である。しかもこれを基礎とした上で、非合理的感情の側面からの動機づけとしてなされる可能的行動への影響づけをとらえようとする場合には一層のことである。観察者と被観察者間を、また被観察者間を媒介する「語彙」およびその「配列」に周到な精確さを妥当性が要求される。こうした質問調査の最も困難な点であろうが、これもひとつには尺度基準となるべき諸アクテムを選ばばあいこれらの意味的な構造連関を明確にすることが閑却視されがちであり、さらに、よし基準ははっきりしていても、質問自体の伝える意味に精確さを期することが難しいという二重の意味でそうである。とりわけ第一の点は、アノミーの概念要素の厳密な考察に基いてはじめて構成

されることが出来る。例えば幾つかの事例研究に利用されているスロール⁸⁾のアノミーの尺度について見てみよう。それは個人が自己の環境に対してもつ知覚に関するアイテムと、この環境の中での自己自身の地位の知覚に関するアイテムとからなっている。「外部環境とその中で自己の位置にいつての知覚・意識」、それはたしかにひとの経験様式にとっての、一般的に重要な観点である。が、具体的に外部環境をどのような枠組、ないし視点からとらえるかという点が重要であって、アノミックな意識、経験の標準化という目的にとってスロールが他のアイテム構成でなくこの尺度基準とその組合せが必要であり充分であるとしたことへの説得的な理由づけは得られないと思われる。

その具体的内容においては未だかかる基本的な問題を擁してはいるが、それにもかかわらず、この方向の研究はアノミーのひとつの「標識」の確立という点で今後展開するべきひとつの積極的な方向だといわねばならない。

ひとの主観的、個別的な「意味」が、標準化され一般化された「数量」的次元に還元して認識しうるかという疑問・反論は十分に予期されるし、現に存在する。しかし数量化および統計的認識は本来、主観的個別的意味の個々のものを完全に理解せんが為の方法ではない。それは単に傾向性を理解しうるのみであろう。そして数量化的方法はあくまでもひとつの標識化の試みであることは銘記するべきであろう。しかもそれはデュルケム以来のアノミーの研究手段の展開であるといえよう。曾ってデュルケムが社会学的方法の一つの基本方式として「われわれの目のとどかない内的事実のかわりに、それを象徴する外的事実をもってし、後者をつうじて前者を研究すること」⁹⁾とし、具体的に「自殺論」において卓越した社会統計的資料の分析で範例を示したことは周知のところである。しかしながら、ひとつの研究様式がこれを要求し、しかも科学的技術の水準の変化が許容するならば、具体的な研究手段は変容しうるか少くとも新しい手段を付加しう

る。爾後の社会心理学の発展と共に「内的事実」の踏査はますます拡大されるであろう。

ここでは全く触れないけれども、精神分析学、精神病理学の発展も、かかる数量化に対応する「質的」説明としてであるが、同様に心理的アプローチとして注目すべきであり、アノミーのもう一つの「標識」の可能性を我々に与えるものと期待されよう。

認められる第二の傾向はマートンのいわゆる方法論的経験主義⁹⁾ともいふべき諸研究である。アノミー意識と多数の経験的変数の相互関係・因果関係についての仮説設計とその検証とである。考えられうる殆んどあらゆる変数との関係が調査されている。職業・収入・教育程度・所属宗派・社会経済的地位・年令・居住地区の階層程度・そのサイズ・職場の官僚制機構内での地位・機構の権威主義化の程度・家族的背景・婚姻上の地位etc, etc. アノミー感を意識の一方の極とするならば他方、野心・意欲・志望の極があり両者は程度の連続体をなしていると考えられるから、後者に関する調査研究を加えると夥しい数の事例データをわれわれは持つことになる。アノミックな意識と社会的存在基盤との相互的規定関係の理解にとってこうした研究方向は重要かつ必須であるが、実際には諸成果を集約してアノミックな意識と存在拘束的諸条件の間の何らかの規則性を見出すことは多くのばあい困難な状態である。基本的にいって、これら諸調査間の、あるいは調査と理論的意味づけの間の非蓄積性、非連続性に妨げられるのである。対象設定の恣意性・悪しき「小」範囲主義、尺度基準の不明さ・恣意性、アノミーの空間的拡散と個人心理内への深化の程度との混同などの欠陥が、この原因となっている場合もある。しかし主たる理由はやはりアノミー概念の明確な且つ共通な指標のなさにある。これを欠く限りアノミーと経験的諸変数との因果関係の調査は今後も、バラバラに、際限なく、行われざるを得ない。

概念の明確な指標の確立とは、それに定式化しようとする経験的事象の

特性ないし属性に関する厳密な理論的把握なしにはありえない。そしてこの把握が研究主体の関心によるにせよ事象の本質規定によるにせよ一義的あるいは数義的な要素の抽象によって為されることも周知のとおりである。それゆえかかる概念要素の理解を欠くところの研究様式は、たとえ仮説一検証が一点非のうちどころなくされた場合にも、それらは限定された条件下での或る種の因果的結びつきを知ることができるではあろうがアノミーという現象それ自体の性質⁹⁾についてより発展的な理解をなすにはいたらないという制約を蒙っているように思われる。

次に以上の如き二傾向とはかなり内容を異にする、より全体的・包括的な研究がある。デ・グレージア¹⁰⁾、D・リースマン¹¹⁾のそれである。これらは厳密に心理主義的アプローチというより、むしろ歴史的危機の関心を中核とし、社会学的状況配置の中でのアノミー意識のあり方を追及している。

グレージアはアノミーを「集団・共同体もしくは社会に支配的な価値体系・信念体系の攪乱から生ずる精神的緊張状態」¹²⁾と規定しているが、なおこの個人的心的レベルと区別された社会的文化的レベルのアノミーをも考慮している¹³⁾。しかし基本的にはデュルケムが捨象した個人的心理的側面からの分析がかれの主要な関心である。「The Political Community」の原題をもつそのアノミー研究の詳細をここに紹介することはその任ではないが、アノミー研究にとってきわめて示唆的な問題を取扱っていると思われるので、これらの点に関し簡単に説明を付そうと思う。第一に注目すべきは、単なる意識一般ではなく、イデオロギーとしての意識形態を問題にしている点である。かれのイデオロギーとは支配者と被支配者よりなるひとつの政治共同体の結合紐帯としての信念体系をさす。アノミーの社会環境が支配と被支配の社会関係の中でとらえられ、かかるものとしての政治共同体の階続性に対応して、理念的表現たる価値の階続がある。ひとはこのような信念体系によって結合し、またそうすることを、明白に意識する

と否とを問わず、要求している。この要求の遍在性のゆえに政治的（宗教的）信念体系は遍在的である。アノミーの研究は「政治的共同体を形成している忠誠のきずなを強めたり弱めたりするイデオロギー的要素の研究である。」¹⁴⁾それは共同体の最高価値の研究である。

「単純アノミー」とはかかるイデオロギー間の葛藤の心理的帰結としての不安であり、「尖鋭アノミー」（アキュート・アノミー）とは単一のイデオロギー内に葛藤が生じやがてそれが凋落した状態である。彼のいわゆる「支配者の『死』」¹⁵⁾

第二の特徴としてかれはイデオロギーにおける「情緒的機能」（＝愛の機能）をきわめて重視する。支配者は共同体にとって最も重要な機能部分に対する実行能力の持主であらねばならないが、支配の正当性は加うるにかれへの畏怖と親愛によって成立する。「契約」と契約の「非契約」的要素の一体化である。近代における個人主義の原理がひとつの「社会の自我理想」でありながらそれ自体で社会的統合の十分な基礎でありえないとした「分業論」（デュルケム）の基調とそれは機を一にしている。社会の「自我理想」はこれについての「知識」によってよりも「集合感情」による容認と支持を通して実現される、とグレージアも考える。

以上のようにグレージアのアノミー論の独自さは、そのイデオロギー論的視点と、イデオロギーの情緒的機能を重視するゆえにアノミーの心理主義的解明へと展開している点とに認められる。自己の内なる支配者からの分離不安から生じる非合理的感情の統合吸収の心的メカニズムの考察は興味深い。（勿もこの問題はマンハイム以来の大衆社会論がつとに、また中心的に提起してきた論点であって問題自体として新しいものではない。あらゆる社会的連帯の機能的要件の十分ではないがひとつのものはこの情緒的要素である。それは殆んどあらゆる社会集団論が言及する集団のひとつの構成要素である we-feeling である。）

ところでイデオロギー論的視点 ①共同体の最高価値の危機②のみなら

ずこれが社会の支配・被支配関係の構造の危機と対応する、という見方)は他の心理主義的アプローチとはもちろん、機能主義的なマートン理論とも全く異質の点である。それはかれの概念国式をひとつの包括的・全体的因果認識の枠組たらしめている。しかし、にもかかわらず、実際にかれが行なっているアノミーの原因の追及(第二章→第三章)の成果は、原因と結果の同一視、原因の中に結果を含むところのトートロジーという貧困な陳述でしかない。

単純アノミーとは「信念体系間の葛藤の心理的帰結として成人のうちにある断続的危機」¹⁶⁾である。かれはいう、「単純アノミーは信念体系間の衝突の結果、もっと厳密にいうならば信念体系間の指向のあいだでの葛藤の結果」¹⁷⁾生じる。

また尖鋭アノミーとは「単一のイデオロギー内に葛藤が現われる場合、あるいはもっと端的な表現を使うなら、一つの信念体系がグラついてきた場合」¹⁸⁾の状態なのだが、その原因は「支配者の凋落に伴って」「イデオロギーの内部分裂」¹⁹⁾の生じる所以である、と。

かれが主に述べているのは、それを通過してアノミックな心的状態がもたらされるところのもう一つ別の先行する意識過程ないしその心的メカニズムである。これはアノミーの原因とは異なる。ひどい宿酔の不快に悩まされるAにとって不快の原因が宿酔という生理的メカニズムにあるのではないように、同様の心理主義的過誤はアノミー克服についても見られ、次のような診断が適切であるとは首肯し難い。

「孤独な個人が執拗なアノミー的緊張にとらわれたときに、これに対応する方法はひとつである。かれが辿っている指向の過程は、いささか断絶的ではあるが、正しいものに違いないと自分にいい聞かせること、これを確実にするためには、現状をもたらすうえに責任のある有力者またはかれと同様躓きながら同じ信念の過程を進む共同体の他の成員から何らかの是認か愛情を求めねばならない」²⁰⁾(傍点筆者)

われわれは個人的なものであれ集団的なものであれ歴史の中に殆んど無数のそのような試みを見出す。

たしかに「一度人が何らかの意味をその時の状況に附与すると、続いて

なされる行動やその行動の結果はこの附与された意味によって規定されることになる。」²¹⁾そして「人々の状況規定(予言または予測)はその状況の構成部分となり、かくしてその後における状況の発展に影響を与える。」²²⁾しかし、社会現象の因果的解明にこのような「人間係数的」公理を「媒介」とする認識の不可欠さを認めるにしても、問題の解決においてかかる「状況規定」があらゆる効力を発するとはいえない。というのも、状況規定ないし動的算定(マッキーヴァー)には誤まったものとそうでないもののが含まれるからである。デュルケムの神話的真理と科学的真理といってもよい。誤まった状況規定即トマスの自己成就的予言の「いかにももっともらしい効力は、誤謬の支配を永続させる。」²³⁾理念が現実を悪循環させるといってもよい。

単純アノミーにせよそれが個人的レベルの問題でなく「慢性化」し、「構造的に誘引される」とき、それは構造的原因をやはり問題とせざるを得ない種類のものである。

事実においてグレージアは「心理的」メカニズムを通じて実現されるべきいくつかの社会的、歴史的条件を implicit に記述している。がそれらは明確に範疇化されないか、相互に関連づけられていないのである。イデオロギー、支配と被支配、権力、究極価値など、重要な概念範疇を陳述しているにもかかわらず、それらの間の厳密な論理的関係、継起ないし共存の必然性については、何らの定式化もない。とりわけ前三者の政治社会学的範疇は因果的論及の中で全く欠落している。

アノミーの全体因果認識の為には、単にアノミー概念の確定にとどまらず、関連する諸概念・範疇のより勿括的な定式化を必要とする。グレージアの場合それらを説明記述の背景として、即ち「残余」として暗黙的にとり出すにとどまった。彼の関心は、あくまでも心理的平面におけるアノミーの問題である。そのイデオロギー論的視点及び図式はむしろ事後解釈的着想の感が強く、諸事例に適用して一般化的性格を検証しうる理論的仮説

として展開されているとは言い難い。

方法論的には、大衆社会の中間層を「他人志向」型—過剰同調よりくる不安のアノミーの階層として追及したリースマンらの仕事も、これときわめて類似しているといえる。

心理学的レベルに標徴されるアノミー現象は以上に考察した如く、いくつかの重要な研究方法を示唆しているということがいえる。しかし、これとは別に、それらがアノミーの「概念」内容および関連する諸概念の「定式化」の点で、非常に混乱しないしは軽視されている傾向が看取されたと思う。

註① Sebastian de Grazia, 「疎外と連帯」, 佐藤・池田訳 7頁。

② D. Dean, "Meaning and Measuring of Alienation" in A. S. R., Vol. 26. 1961.

③ M. Seeman, "On the Meaning of Alienation" in A. S. R., Vol. 24, 1959.

④ A. J. S., A. S. R., Social Forces, Journal of Social Psychology, 他

⑤ これと平行してアノミー概念と疎外概念の混淆がもうひとつの顕著な特徴である。周知のように両概念は、ひとしく資本主義の自由主義段階に体制的危機意識として登場したとはいえ、思想的にも学說的にも本来全く対立する立場の表明であった。アメリカ社会学、ないし社会心理学でのこのような混淆化は、アメリカにおけるマルクス主義の不毛、エスノセントリズムにもよるが、重要なことは、現実の問題が「経験様式」のレベルで追求され、よくも悪しくも即自的心理的経験を重視する心理主義的傾向が支配的となっている点であろう。両概念の混淆も、かかる心理主義を基礎としての現象である。それゆえ、はっきりと明示された場合を除いて、ここでは両者を同一視してとり扱うものと思いたい。

⑥ Leo Srole, in R.K. Merton's Social Structure and Social Theory, chap. 5,

⑦ E. Durkheim, 「社会原的方法の基準」田辺訳, 15頁。

⑧ R.K. Merton, 前掲書, 森・金沢他訳, 106頁。

⑨ 同上

⑩ Sebastian de Grazia, 前掲書,

- ⑪ D. Riesman and others, 「孤独な群衆」本書については「社会的性格論」の観点より別に詳細に検討を加えているので省略する。
- ⑫ de Grazia, 前掲書
- ⑬ 同上, 個人的レベルのアノミーとは, 「目標喪失感・崩壊感覚などの不安感に苛まれる自己疎外の精神状態」社会的・文化的レベルのアノミーとは「共通の価値, 信念が弛緩, 崩壊, 混乱した状態」
- ⑭ 同上
- ⑮ 同上 194頁
- ⑯ 同上 120頁
- ⑰ 同上 121頁
- ⑱ 同上 122頁
- ⑲ 同上
- ⑳ 同上
- ㉑ R. K. Merton, 前掲書, 383頁
- ㉒ 同上, 384頁
- ㉓ 同上, 385頁

(3) マートン理論の諸問題

マートンのアノミー論¹⁾は、彼のいわゆる機能主義的アプローチのひとつのモデルであるから、マートン自身の示した範例を念頭におきつつ考察していくことが賢明であろう。

彼はアノミーを逸脱行動の問題に関連づけ、この逸脱が「正常な」反応として生み出される社会過程のメカニズムがあると考え、何故に或る種の社会構造がその社会の一部の人々に特定の圧力を加えて同調的行動よりも非同調的行動をとらせるか、と彼は問う。

個人をとりまく環境には文化構造と社会構造があり、前者は特定の社会ないし集団の成員に共通な行動を支持する規範的価値の組織体、後者はそれら成員がさまざまな仕方でもかかわりあう社会関係の組織体と考える。アノミーはこの文化構造の崩壊である。それは文化的に規定された目標・目的と、集団成員がこれに応じて行動する際の社会構造上の圧力—制度的手段の間に著しいへだたりがある時に生ずる。即ち文化構造と社会構造の

「非統合」のばあいである。社会構造は文化的命令に発する行為の障害物となることもあればその自由な通路となることもある。文化構造と社会構造が「非統合的」で、文化構造が要求する行為や態度を社会構造が阻んでいるとき、規範の崩壊即ちアノミーがある。

以上にマートン理論における次のような重要な仮説が出てくる基礎が示される。即ち、「現代は文化的に承認された各種目標に各人がその情緒的確信を傾注するよう傾向づける一方、かかる目標達成の為に規定された方法・手段には殆んど情緒的支持を与えない文化である」と。

このように文化的目標と制度的手続きとの強調の度合に差異があって前者が強調されるあまり後者がふみにじられ、その結果多くの人々は、技術的手段だけを配慮して行動するようになる。こうした脈絡にあっては唯一の重要な問題は、文化的に承認された価値を獲得するのにどのような手続きが最も有効に利用しうるか、ということだけになる。技術的に有効な手段は、文化的に正当であると否とを問わず、通常、制度的に規定された行為よりも望ましいものとなる。こうした制度的規定の衰耗過程が続くにつれて、その社会は不安定となり、デュルケムのいわゆるアノミー（無規制状態）が出現する。

かくて一般的に文化的価値に対する個人の適応様式として、彼があげるタイポロジー（conformity, innovation, ritualism, retreatism, rebellion）のうち、アノミーは第二の「改良型」により内在的であるということが出来る。

マートンのアノミー論を以上のように概略して大過ないとすれば、その分析図式の諸要素間の論理的な整備の程度と、これよりするところのアノミーの性質に関して以下の三つの問題を指摘することが出来ると思う。

第一、彼はアノミーを文化構造の崩壊と見なしている。文化構造とは、規範的価値の組織体である。ところでこのような規範的価値の組織体は、大きく成員行動の目標、動機づけの形成に関与する諸規範と、実際にこの

ようにして規定された目標を実現する際の諸手段・諸条件に関する規範とに区別しうる。後者はかれのいう制度的規範に相当するものであるが、これに対し、前者は文化的価値とでも言う。前者は「のぞましいもの」の観念としてひとの主体的内的条件の形成にかかわり、後者はその実現に際し、ひとの外在的・環境的条件をかたちづくる。それは但し、環境条件全般ではなく、自然的、物理的なものを除外した社会的関係としての環境条件についての規範である。それは文字通り制度に関する規範、社会構造に関する規範でもある。マートンが文化構造の解体と言っているのは、この第二の意味での制度的規範の衰耗であって、文化的目標の解体ではないのである。

ひとしくアノミー、規範の解体とはいっても、「規範」の意味する内容はデュルケムのばあいとはかなり異なっている。言うまでもなくデュルケムは個人の行為の準則をなす諸規範の崩壊をもってアノミーと見なす考えの先駆²⁾であるが、かれの場合、はっきりと第一の意味での文化構造、規範的体系の解体を意味していた。その前提に人間性一般についての仮説—快樂や幸福に対する欲求はすべての人間に本質的に無限であること—と、社会と個人の関係についてのデュルケム独自の一般的仮説—社会の個人に対する道徳的優位さ—の存していたことは周知のとおりである。欲望統制のメカニズムは個人の内部にはなく、社会の中にある。社会の統制がなければ個人の欲求・価値は無限に拡がり、万人の万人に対する闘争があるだけである。しかし実際には各人が正当に望みうる限界についての暗黙の規定があり、「ひとは正当に望むことの出来るだけしか欲しない。」³⁾この点についてのデュルケムのミルら功利主義者批判の貢献はパーソンズ分析に詳しい。「それら（諸規範）はただ単に目的に対する個人の選択を（手段的に）規制するだけでなく、個人の欲求や願望の形成自体が部分的にはこの規範によって決定されている。」⁴⁾この目標に対する「統制的規範の構造がひっくりかえり、解体するとき、個々の行為は同様に解体し、混乱す

る。——個人は無意味な行動の真空の中に自己を見失う。」⁵⁾ アノミーとはかかる状態、即ち語の完全な意味での「pure individualism」⁶⁾の状態である。

無規範の意味内容は著しく異なっていることが自明であろう。もちろんデュルケム自身も社会的規範の意味を、欲求の形成と統制のはたらきとしてはじめから考えていたのではなかった。周知のように、はじめかれはもの(chose)としての社会事実、社会規範の特性を、何よりその外在性と拘束性としてとらえていたからである。この社会的拘束 *contraint* および外在性の意味は、しかしながら、はじめはそうであったところの物理的な物とのアナロジーからすべり出し微妙な、しかしはっきりとした質的变化をとげていることである。これについてはパーソンズのブリリアントな解説がある。自然的・物理的条件もしくは法則が人間行為を拘束する場合の拘束の仕方と異なり、社会的拘束は人間的仲介としてのサンクションを経てのみ生ずること。食物をとらないで飢えによる死と、殺人を犯して死刑に処された場合の死とはかように異なる。サンクションとは、行為者自身の意志からは独立している（＝外在的）にしても人間の普遍意志に依存しているような行為の結果である。即ち自然的拘束から社会的拘束を区別するのは人間意志の表現だという事実であり、この段階になると外在性の意義と比重は少くなり、代って社会的拘束における「自発性」の要素が強くなってくる。

社会的規範の個人に対する拘束は、かれの行為の結果がサンクションによって左右され「条件」づけられるというだけではなく、むしろそれは行為の目的、動機づけの形成自体に参与する機能をもつこと。拘束の本質は、規範に対する〈義務〉としての〈自発的な〉従属を意味するようになったのである。規範の内容におけるこの〈義務〉と〈自発性〉（尊敬とデュルケムは他のところで言っている）⁷⁾の相互媒介的共存において個人と社会の関係はカント的一元的道徳法律とホッブスの功利主義の折衷的観点として

示される。このことはデュルケム自身の記するところに詳しい。パーソンズによればこのことは「行為における個別的要素（たとえばあれこれの目的）はもはや具体的主観的個人（自身の目的）と見做しえず……目的の要素はもはや決してそれが means-ends の図式にあらわれるようには「個人的、功利主義的」なものではない。それは「社会的要素」を含んでいる」⁹⁾ ひとの「社会的義務」を「自発性」においてひきうけるという意味での規範的拘束の考え方を値出することによって社会と個人の関係がそこに有機的統一として結節され得たともいえる。個人の「自発性」を促し、励し、支援する「集合感情」は、逆に、必要ならば制裁をも加える。デュルケムのアノミーとは、よくも悪しくも、こうした集合感情ないし連帯感情の衰退を通じての「社会の自我理想」の失墜である。

ところで「文化的に承認された目標」という語が示すように、マートンは規範体系における第一の要素を無視しているのではないことは自明である。しかしながらそれはアノミーの考察における与件ないし常数としてであり変数としてではない*。このような観点の相違は、両者が直面している社会的現実それ自体の著しい変化があり、これに対する認識の結果に所以すると部分的には言いうるであろう。

* H・ハイマンの批判はマートン理論のこの部分、即ち、文化的に規定された目標の (ex. monetary success という目標) 全階層にがひとしくバラまかれ、内面化されているという、マートンの一般的仮説の与件に対するものである。ハイマンは階層の価値のことなりを強調し、低階層では、要求水準ないし志望の水準それ自体が低くしたがってマートンの主張するアノミーへの strain も存在しないのが現状であると、強調する。これに対してのマートンの反論はこの種の問題の考察にとって興味深い。つまり彼は「相対的比率」と「絶対数」を区別する。そしてもしも、低階層においてかかる文化的目標をうけ入れる志向の「絶対数」が、文化構造と社会構造上の矛盾からうける圧力の結果としての低階層の逸脱行動率——かれの仮説を満足させるだけの——に対応する程のものであれば、充分であるとしている。しかし、彼自身も認める如く、この仮説については、たとえば高度の文化的画一化と「無階級社会」「開いた社会」のイデオロギーが露しい

アメリカにおいてさえ、やはり「経験的データ」を必要とする問題であろう。たしかに文化的命令——たとえばアメリカの金銭的成功——は、それを媒介するメディアの伝播能力と社会移動とにより均一的にばらまかれる度合は比例的に高まるであろうが、しかし他方それは「政治形態」の如何にも強く影響される。また、かかるフォーマルな価値の指向程度の「種差」のみならず、インフォーマルな、あるいはホンネとしての動機づけや、反価値、および両者の折衷としての Subculture, transculture 価値のすりかえなどの問題も重要である。

H. Hyman, "The Value Systems of Different Classes" in Bendix, R. & Lipset, S. M. eds, 1964.

「規範」についてのかかる内容上の差異は、さらに単に定義上の相違や対象性の相違のみならず次のような相違も含む。たとえばパーソンズは一般性の水準に従って価値規範に低次から高次への幾つかの段階性を区別している⁹⁾。これよりすれば、「全ての構成単位に共通な基準」であるところの文化的命令はその最高段階の価値ということが出来、制度的規範はそれより低次の規範即ち社会体系化の分化した単位に固有の基準であるといえる。換言すればデュルケムは社会における最高価値の解体現象をアノミーとしてとらえ、マートンは社会構造内部に関する制度的規範の解体をアノミーと理解しているといえよう。

かように、マートンがきわめて単純明快に図式的に提示した文化的に承認された目標と制度的規範の齟齬には「規範」概念のかかる意味内容によってアノミー現象それ自体がデュルケムのそれとはきわだって異るところの特殊に限定されたものとしている点を確認せねばならない。このことよりして、低次の段階における制度的規範の衰耗がより高次の最高価値および価値体系のヒエラルヒー全体に及ぼす影響という問題、ひいては社会変動とアノミーの問題、価値規範の諸機能 (ex. 情緒的統合機能と評価的響導的機能) の関係、集合体の価値と個人の非合理的感情や動機づけの問題など、残されている多くの問題があることが知られる。

第二. 制度的規範と社会構造 (=社会関係の組織体) との関連。

かつて身分制社会においては社会構造と制度的規範とは極めて近密に対応していた。社会関係の組織原理ないし身分原理と、これへの人の配分基準は厳格にかかる規範の中に制度化されていたといえる。「士・農・工・商」、「貴族と平民」「領主と農民」「カースト」などはさらにそれぞれの下位の身分を次々に下降的に規定しており、ゆるぎない上位と下位、支配と被支配のヒエラルヒーを構成していた。しかもこれらのヒエラルヒー構成は殆んど完全に制度的規範として可視的なものであった。両者は歯車の等しい歯車の如く相互に噛み合っておりまたそうすることが要求された。

しかし今日では両者の関係は異なっている。社会関係における身分制原理からの「自由化」に対応してかつての制度規範の細部は多く毀ち落ちた。現実の社会関係には、新しい不可視的な上位と下位、支配と被支配の原理が依然存在する。それがどのような諸原理であるかについては未だに非決定的な議論があるばかりであるが、それでも第一に社会関係それ自体の配分に関する基準—資本と労働、階層（その基準はさらに多様であることは周知の如くである）—、これへの人の配分に関する基準—業績主義と属性主義、活動主義と静寂主義¹⁰⁾—について客観的に決定しようと試みているわけである。

まずマートン理論が今日では極めて常識的とはなっているが「階層」視角を導入することによりアノミー概念の経験の有効性を一歩進めた点は評価されねばならないであろう。これは経済的条件＝階級と同一視しこれの有効性を認めることがマルクス主義的唯物論への同調であるかのように見なす前世紀的なデュルケム理論との隔たりであろう*。

* 勿論「自殺論」を読めば直ちに、かれが地位ないし機能という語を用いることで階層に替わる説明概念としていたことが知られる。

この点については、デュルケムの規範が、何に関する配分の規準であるかの点から、「各々の地位に伴う欲求充足の様式」（＝目標を規定する規準）、「それぞれの地位にどのような能力を有する人が選ばれるかに関する様式」（＝社会構造に

関する規準)のちがいを区別し、これをパーソンズの「用具及び報償の配分」と「人 personnel の配分」と関連させた作田啓一氏の論文がある。

作田啓一「アノミーの概念」社会学評論4巻4号

文化構造と社会構造の「非統合」、あるいは後者による前者の阻害とはいうものの、マートン自身の階層概念、制度的規範(かかる階層への人々の配分の仕方についての規準)の内容もアノミーと社会構造に見る限り明確とはいえない。そこでは、いかなる規定によるにもせよ、かかる階層的な社会関係の存在における下位者が、文化構造と社会構造の構造的矛盾によってアノミーへの傾向にさらされているという、彼の主要な論述を見ることが出来るのみである。しかし言うまでもなく、マートンのアノミーの概念図式をアノミーの研究の経験的に有効な分析図式として、用いる際には、階層や制度的規範についての明確な仮説なりの定義を不可欠としていることは言うまでもない。

第三、現代文化におけるアノミーの発生の原因は、「一方では文化的に承認された目標への過度の強調と、他方でこのような目標達成の為に規定された方法・手段に関する規範の社会化・内面化が充分でない」というこれらの一般化された仮説を検討する必要がある。

論理的なコロラリーとしてならば、かかる齟齬から生ずるアノミーは、ひとつの形態として、存在しうるであろうが、それは経験的にはどうであろうか。アメリカで、またわが国で、或いはその他の国で検証されうるだろうか。また、経験的に一般化する図式であるか否か、つまりはアノミー現象の解明に因果的認識をも可能にする概念式であろうか。この点についてわれわれは経験的データを殆んど持たないのだから、概念図式をその論理性において有効性を再考察するほかはないと思う。

文化的目標への過度の強調とは、どのような意味であろうか。いかなる経験的事態をさすのであろうか。相対的な安定均衡にある社会ならば、その文化的命令を強調しない社会は存在しないだろうからである。さらにわ

れわれは文化的目標を過度に強調し、手段を選ばないことによって、アノミーを克服した（ないしはしようとした）多くの歴史的事例を知っている。ほとんど全ゆる宗教集団の原初的派生期の状態とはかくの如きであり、甲羅を失ったカニを大衆という甲羅の中に統合したナチズムやファシズムとはやはりかくの如きであろう。

しかしマートンが経験的に定式化しようとしたのはかかる事態ではなく、現代アメリカの社会的文化的状態であることは無論言うまでもない。その内容（仮説前半の）とは次の如くである。「ある階層にとっては実際には実現不可能な文化的目標（たとえば金銭的成功—マートン）を社会の全成員に対してひとしなみに実現するよとの文化的・道徳的命令がなされていること。」換言すればそれは、ある画一的な「虚偽意識」が階層的に全範囲に、また深く支配されている度合いである。これが「過度の強調」の意味である。

次に仮説の後半については次のようなパラフレーズがなされうる。即ち社会関係の組織原理の明確な基準が認知されていないかもしくは曖昧にされていることによって制度的規範の逸脱が多くなされること。

以上を微分化していえばアノミー発生の社会的先要条件とは、①階層・階級分化の存在、②ある階層・階級にとっては虚偽であるような画一的な文化的命令が存在すること、③かかる文化的命令ないしはイデオロギーが全階級・階層的に、情緒的に支持されていること、④社会関係の構成原理が曖昧にぼかされて極端には open-class-ideology が広く支持されていること。

マートンのアノミーの図式はかかる先要条件を満たす社会において経験的に有効性もちうるのではないだろうか。もしそうであるとするならば、たとえばそれをわが国のアノミー研究に適用する前に、その対象性を先ず検討する必要があるであろう。

註① R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, chap 4~5, 以下

の説明については頁数は省略。

- ② Emile Durkheim, *Suicide*
- ③ 同上
- ④ T. Parsons, *The Structure of Social Action*
- ⑤ 同上
- ⑥ 同上
- ⑦ E. Durkheim 前掲書, 252頁
- ⑧ T. Parsons,
- ⑨ T. Parsons, *Theories of Society*
- ⑩ de Grazia, 前掲書

(4) 結論と展望

いうまでもなくマートン理論は、その二つの方法論的基盤—機能主義と中範囲理論—に依拠するものであり、かかる文脈でそれは理解されねばならない。でなければわれわれははなはだの譏りを受けることになる。

かれは一般に機能的分析が社会構造の静態に焦点をおき構造変動の研究を無視するという批判に対して、「逆機能」の概念をもって変動論にアプローチしようものとしている¹⁾。逆機能の概念は「構造的平面におけるひずみ、圧迫、緊張」の概念である²⁾。それはまさにアノミー論の基礎視点をなした概念である。しかしながら「どのような手続きを用いたら、社会学者は社会体系におけるひずみや圧迫の蓄積をもっとも十分に測定することが出来るであろうか」とのかれ自身の問いは、今後の経験的研究にまたねばならない。

制度的規範の解体としてのアノミーの原因は、かれによれば文化構造と社会構造の齟齬にあるが、何故に、またいかにしてこのような齟齬がきわだたしめられるかについては考察を断念せざるを得ない。両者のあり方はいずれも機能的分析の「与件」なのである。前述の変動論の問題は、機能主義アプローチに立つ限り、一定要素を与件とし他を変数としてこれらの同時的並存関係に見られる機能なり逆機能なりがそこでの因果的考察の主

体となる。逆機能やひずみの原因はこれら諸要素の関係のあり方自体に求められがちである。そのような場合もありえようが、因果的認識はそれのみならず、諸要素がすべて変数となりうる時系列的継起における因果の考察を不可欠とする。逆機能概念はたしかにアノミーと社会変動の関係にひとつの通路を与えはするが、以上みるようにその場合の因果的考察は限定されたものである。

以上までわれわれは研究の概念的有効性、その意義をさぐることに終始し、われわれ自身の何らかの仮説を提示するには至らなかった。ここでは極めて暫定的にアノミーを「制度的規範の動揺によって生じる文化的価値（＝社会の自我理想）の非統一ないし解体の状態」と定義しておくに止めたいと思う。そしてこの仮説的定義と関連すべき諸々の範疇・概念—社会構造の組成と配分の諸基準、構造的変動と構造内変動、社会移動およびそのテンポ、イデオロギーと個人的信念体系および動機づけの体系などその他について検討を進めたいと思う。

註① R. K. Merton, 「社会理論と社会構造」森他訳48頁

② 同上 48頁